CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Utsunomiya University Academic Information Repository

あ と が き

幼児が降園した後の本園の職員室はとてもにぎやかである。誰かが保育の悩みをポロリと打ち明けると、それぞれの教師がそれぞれの立場から意見をいい、果ては議論を交わし合うこともある。ある人は自分の経験から話し、ある人は文献に書いてあったこという。笑ってしまうのは、さんざん意見をもらったからといって、相談した本人が誰かの意見に従うかというとそうではないということだ。もちろん従うこともあるが、「いろいろな御意見をいただきましたが、やっぱり自分の思うようにやってみました」というように、他の人の意見を自分なりに解釈し、いろいろ考えた上でやっぱり自分の思ったようにしてみる・・・ということが多いのである。

今年度は研究テーマの副タイトルに「協同的な学びに向けて」という文言を掲げたが、この副タイトルも多くの議論を呼んだ。「協同的な学び」という言葉からそれぞれの教師たちは具体的な保育の場面、子供の姿を自分なりにイメージし、「協同的な学び」の解釈をするわけだが、その解釈はひとりひとり様々であるから、研修会ではまとまりがつかない。自分では「協同的な学び」をわかっていたつもりだが、研修会をすればするほどいろいろな意見が出てきて、頭の中がかき回されわからなくなる。もう一度家に持ち帰って考えるとわかったような気になるのだが、また次の研修会ではわからなくなるのくりかえしであった。しかし、おもしろいことに家に持ち帰るたびに自分の考えが深くなって磨かれていくような気がした。自分ひとりでは決して思いつかないような発想をもらい、そのことをふまえて自分の考えを見つめ直し、自分の中に新たな価値観が生まれていく・・・。もしかしたらこのことが「協同的な学び」なのではないか。

よく「共通理解」という言葉をきくが、考えを共通にするというのは所詮無理な話ではないかと思う。そして、研究をする場合にはそのことがいいことではないような気がする。大切なのはまずひとりひとりが自分なりの考えや思いをもっていることであり、さらに自分なりの解釈だけにとどめず、他の人の意見や感性をとりいれながら改めて自分の考えを見つめ直し、自分が磨かれていくことではないか。

自分の考えは間違えていない。そう自信をもつのは大切なことだが他の人の話をきかなくなったらそこにその人の成長はないのではないかと思う。そのような意味でも幼稚園以外の教育機関や地域、他の専門家の意見にも耳を傾け、協同的な関係を築いていきたいと願う。今年度の研究に対して様々な立場から御意見をいただけたら幸いである。　　（前原）